

2004年度 北海道浅井学園大学・北方圏生活福祉研究所 講演会

「消えた新妻・神話の再生」

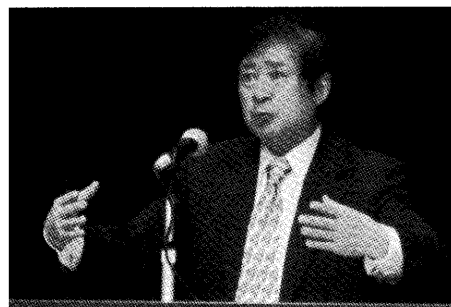
—古代の伝承から現代の噂話まで、さまざまな話の中に生き続ける「異界」のイメージを解き放つ—

日 時：平成16年10月14日（木）18：00～20：00（開場 17：00）

場 所：北海道浅井学園大学 北方圏学術情報センター 1階

ポルトホール

講 師：山本 節 先生（静岡大学人文学部教授）



竹川：皆さん、今晚は。ただいまから北海道浅井学園大学の北方圏生活福祉研究所の講演会を開催いたします。

本日の講演は、山本節先生にお願いをいたしまして、「消えた新妻・神話の再生」という、今までの生活福祉研究所の行っております講演会と、ちょっと趣を変えたテーマといたしました。いろいろ研究所の中で、検討いたしましたして、このようなテーマが、面白いじゃないかということで、山本先生にお願いした次第です。

山本先生は、つい数日前まで外国に出張しておられまして、戻られたばかりという、大変お忙しい中を来ていただきまして、今もちょっと先生とお話ししていただきまして、時差ぼけがあるかもしれないなんていうようなお話もございました。そういうようなお忙しい中を時間を割いていただきました。

山本先生と山田先生が、親しいということで、山田先生にもお願いしまして、空いている時間、山本先生の空いている時間ということをご相談いたしました。この時間、ちょうどとれることができたということで、お願いしたわけでございます。

ここでちょっと簡単ですけども山本先生のご紹介を、させていただきますと思います。

山本先生は、1939年に東京でお生まれになりまして、東京大学をご卒業後、愛知教育大学、また白百合女子大学の教授を経まして、現在、静岡大学の人文学部の教授をなさっております。この間、フランスのパリ大学のほうにも、お勤めになりました。また、平成15年の10月には、フランス政府より、パルム・アカデミック勲章をフランス政府より受章されております。

このような神話に関する日本的な権威ということで、今日はお話を聞かせていただくという、非常に恵まれた機会を得ることができました。

入口のところにも、先生の多数の著書がございますが、1～2冊、ちょっと置かせていただきました。もし、興味をお持ちの方がおられましたら、帰りがけにでも、ご覧いただければというように、思っております。

そういうことで、先生には、お忙しいところに来ていただきました。山本先生、どうぞよろしく願っていたと思います。では、先生、どうぞよろしく願いたします。

山本：ただいまご紹介を賜りました静岡大学の山本節でございます。

ふだん、あまりマイクを使い慣れておりませんものすから、うまく声が入っておりますでしょうか。

それから、お断りしておきますが、私は教師でありながら、あんまり話がうまくありません。ですから、かなり雑駁な話になると思います。どうぞ、今日はあまり期待をなさらないで、お聞きいただきたいと思います。

「消えた新妻」という、大変、おどろおどろしい題であります。私が1977年、パリへ行きました時に、あちらこちらに日本人相手のアジャンス、旅行会社がありました。そこへ行きますと写真が貼ってありまして、奥さんがいなくなっちゃったと。新婚旅行の途中で、ミュンヘンでこういう家内がいなくなりました。お心当たりの方は探してください、というような、そういう迷子探しじゃない、人探しの写真を見た覚えがあります。これが本当に拉致されたのか、あるいは新婚早々旦那が嫌になって、消えちゃったのか。そこは分かりませんけれども、今日、お話しするのは、そのようなことではありません。

これは「都市伝説」という範疇に属する、いわば、広い意味での民間伝承に係る話であります。口承文芸といましようか、口伝といましようか、つまり、口から耳へ、口から耳へ、伝わっていく、ひとつの伝え方の在り方。これは、書物でもものが伝わっていくという伝え方よりもはるかに古く、最も古いメディアであります。

皆さま、昔話とか、伝説とか、世間話とか、そういうような言葉をお聞きになったら、より分かりやすいかも知れません。あの「桃太郎さん」の話ね。あるいは「瓜

子姫」の話であるとか、「一寸法師」の話であるとか。このように、口と耳を使って伝わっていく、この話、こういうメディアの在り方、その範疇に属するものであります。

昔話なんかは、今消えかかっておりまして、おじいさん、おばあさんから孫、子どもに伝わるといふ、そういう伝承の在り方が今ほとんどなくなってしまっておりまして。これに対して、広い意味での世間話、あるいは噂話といってもいいでしょうか。最も報道性の強い、現代的な、われわれの身の回りに起こり得る話。これはなお、今でも命脈を保って、われわれの周りで盛んに話されているわけでありまして。つまり、昔の話ではなくて、現代の話ですね。一昔前でしたら、例えば隣の村の誰れさんが、小判をもらったつもりで木の葉をつかまされたとかね。あるいは、お風呂に入ったつもりで、肥たごの中に入っていたとか。こういう1つの決まった話の型があったわけですが、現在も、現在の生活に即したこのような話があるのであります。

まあ、こういう話は現在では特に、都市の中で語られることが多い。特に、都市文明の暗闇の中で、われわれの生活の不安と結びついて語られることが非常に多い。それでこれを都市伝説というような名前でも呼ぶのであります。

最初に一言言い添えますならば、これらの口頭伝承の中には、特定の国家・地域・民族・宗教・疾病・職業等に対する多くのいわれなき偏見に出会うことが多々ありますが、人間の尊厳の確立のためには、科学的な説明によるその克服が、まずはなされなければなりません。

ところでこの伝承の中で最も多いのが、例えば食品に対する不安。それから、医療に対する不安。それから、このようなわれわれ、人の心や人間関係に関する不安。そういうことが語られる。

ざっと例を述べますと、例えば食品。ナントカファストフードのハンバーガーの中にミミズの肉が入っていたとか、こういう話。

あるいはセーターに腕を通してみたら、中に蜘蛛が巣を作っていて、これに噛まれたとか。

いろいろな話があるのですが、この「消えた新妻」というのは、このような、言わば現代社会の不安の中から生み出されてきた1つの話型といつていいかと思えます。この「消えた新妻」というのは、実は、私が名付けた名前なんですけれども、これがいつの間にかテクニカル＝タームとして通用するようになったのです。今日は、この話型を中心にしまして、これが現代の社会とどのように係わっているのかということを中心にお話をしたいと思います。

まずは、いくつかの例話をお話ししたいと思います。

日本のある大企業のパリ駐在員の妻が、夫と共にフォーブル＝サントノーレ、これはパリの高級ブティックが並ぶ有名な通りであります。その通りを散歩していたけれども、その途中で奥さんが、ある洋服屋に入った。ところがご主人は、日本の男の常として、奥さんと一緒に店の中に入るのが恥ずかしいので、外で待っていたというんですね。ところが奥さんがいつまでたっても出てこない。最後にしびれを切らして、中に入ってみたら、そんな人は最初から入って来ないとシラを切られたというのです。

で、いくら掛け合っても埒があかない。そこで外に出たところが、たまたま警官がやってきた。で、その警官に事情を話して、もう一度中に入って、そのブティックの中をくまなく探索してもらったところ、試着室の床に、仕掛けの落とし穴があって、奥さんは下に落ちていた。それが発見されたというんですね。

彼女は大変なショックで、精神的な後遺症がひどくて、とうとう日本に帰りましたということでした。

この話を私にしてくれたのは、私が親しくしている方で、パリの免税店に勤めておられる奥さまでした。これは本当の話だということ、この穴に落ちこった奥さんの近くに住む、その奥さんの友人から直接に聞いた話だということ、話して下さったわけです。

このような伝承話例が、実は、さまざまなヴァリエーションをもって語られております。

いくつかの例をお話ししたいと思います。

同じくパリの話です。

日本人の新婚の夫婦が、蚤の市、ボロ市ですね。フランスのパリの郊外にいくつか開かれている蚤の市というものがありますが、そこへ行ったところが、新婦が試着室で消えてしまった。売られたそうだが、どこへ連れて行かれたかは分からない。6年前にパリで聞いたことがある。こういうような話。

あるいは、パリのコーマルタンのギャラリー＝ラファイエット。パリで一、二を競う大デパートであります。ギャラリー＝ラファイエットの近くのブティックで人が消える。これは、フランス人社会の話として20年前に聞いた。ま、このような話。

あるいはパリのピギャール。有名なムーラン＝ルージュ、赤い風車というあの有名なキャバレーがあるピギャールの服売場で、日本人女性が試着室に入ったまま消える。目をつぶされ、アラブのハーレムに売られるそうだという話。

あるいは、日本人のスチュワーデスが、ブティックの試着室で消えたそう。ドアが二重構造になっていて、

アラブに売られたそうだという話。8年前、日本で旅行前に旅行会社の人から聞いたそうです。

あるいはまた、パリのブティックは、裏道に入ると危ない。試着室に入ると落とし穴があり、捕らえられてアルジェリアに売られる。気をつけるようにと、ひと月ほど前に年配の人からいわれたといえます。

あるいはまた、このような話もあります。また聞きの話だが、パリの商社の人、パリで日本の女の人に会った。その商社マンがある時、アフリカのどこかへ行ったら、目をつぶされ、舌を切られ、足首を切られた彼女に出会った。パリでは洋品店や個室に入った時に、女の人を誘拐するドアが裏側にある。ブティックに入る時は、ドアを開けたまま入ったほうがよいといわれた。この夏にバルセロナでMさんという人から聞いた。

まだまだ、いくらでも続きます。

ある日本の航空会社のスチュワーデスが、ブティックの試着室で捕まって失踪した。後にアジアのどこかの国で手足を切られて見せ物になっているのを日本人観光客が発見した。彼女は日本語を聞いて涙を流したという…。

また別の話。日本人の女性が試着室で消えるという。だから、店に入っても試着室には入るなど、10年前、パリに来る前にパリに住む人に言われた。それで、パリに来てからは、しばらくは絶対に入らなかった。入るにしても、下から足が見えるところしか使わなかった。パリでも何人もの日本人に言われた。フランス人などの外国人からは言われたことはないけれども。

あるいは、「パリ日本人会」の主催で、一パリには日本人会という日本人の親睦団体があります。その日本人会主催で、駐在員の奥さん向けのフランス語の勉強会がある。その帰り道、シャンゼリゼでウインドウ＝ショッピングをしているうちに、1人の奥さんが消えた。後に半狂乱になって出てきたそう。ノイローゼがひどく、ご主人ともども日本へ帰った。1年前の夏、日本のある旅行会社に勤める友人の奥さんから聞いた。事実だそう。信憑性はさきわめて高い。今日、その奥さんにもう一度、確かめようとしたが、彼女が帰国してできなかった。この話は日系社会のほかに日本人からも聞いているというような話。

また、こういう話もありますね。

日本人の新婚旅行の夫婦がパリに来たが奥さんを見失った。探したが分からず、ご主人は日本へ帰国した。その後、どこかの国で見せ物になっている人が、奥さんに似ているという知らせがあった。会いに行ったら、果たして当人で、手足を切られて「ダルマさん」になっていた。連れ帰ったが彼女は気が狂っていて、何も分からなくなっていたそう。3年前にフランスで商社マンの

奥さんから聞いた。気をつけるようにしなさいと話してくれた等々々…こういう例が何百と出てきます。

今話した話例は、私が、今から15年前、平成元年、パリで3カ月間、調査をした時の調査記録であります。

これらの中で、私が聞いた一番古い話は、今から31年前、1973年ですか。皆さんにお配りした私のレジュメにも書いてありますが、私の弟が東京の芸術系大学におりました時に、大学の中の噂として聞いたというものです。ピアニストとして留学した女子学生が、パリでいなくなってしまうと、香港から出てきたと。これが、私にとっては一番古いものだったと思います。

これはあとでまたお話ししますが、この「消えた新妻」の話が日本で広まっていったのは1973年頃、この前後ではないかと思うのです。

今まで、いくつかの話例を皆さんにお話しいたしました。これらはさまざまなニュアンスの違いをもって話されますが、しかし次のような、1つの共通したモチーフ連鎖のシナリオとして抽象されるのです。

すなわち、若い日本の女性が、見知らぬ境域、例えば外国などで、連れと共に、その連れというのは、新婚旅行の夫である。あるいは、女性の友人である。あるいは姉妹である。あるいは、母親である。このように、必ず、連れと共に、表向きは華やかな、あるいは普通の場合、例えばブティック、あるいはデパート、あるいは通路、街路、このようなどころへ出かけていく。まず、これが第1です。

それから、第2。

彼女が、閉ざされて人目につかぬコーナー、例えばこれが試着室であったり、あるいはトイレであったり、あるいはエレベーターであったり、それから小道の陰であったり、このようなどころへ入っていく。つまり、密室空間ですね。

それから第3番目として、彼女が消えてしまう。その消えてしまうことには、証言者がいるわけで、彼女の連れがその証言者になります。いくら待っていても戻らない。ご主人が店の外で待っていても、出てこない。あるいは、中に入っている、いないと。これが第3番目。

それから第4番目。これは、その彼女が、人身売買の罠にかかり、売られようとしているのが発見される。さっきのフォーブル＝サントノーレの例ですね。地下室に落っこっちゃって、そこで捕らえられているのが発見された。すんでのところでも未然に発見されたというのが、これがこの4番目のAですね。

それから4のBとしては、彼女がすでにもう売られてしまっていて、とんでもないところで発見される。人身売買の罠にかかり売られている。例えば、売春窟、あるいは

見世物小屋といったような。パリでいなくなったのが、モロッコのサーカスで見つかった。あるいは香港の売春窟で哀れな姿で発見された。これが、第4のBになります。

そして最後、第5番のモチーフですが、彼女は精神的に、あるいは肉体的に損傷が甚だしい。つまり、手足をちょん切られてしまっている。目をつぶされている。あるいは耳が聞こえないというような身体的な損傷。あるいは精神的におかしくなってしまう、というような精神的な損傷。つまり、心身いずれか、あるいは双方の損傷が甚だしく、彼女が失踪した以前の世界、平和であったときの世界には、もう二度と戻ることができない。全き形、完全な形では、もう二度と戻ることができない。これが一連のこのモチーフ連鎖によるシナリオの骨組みであります。

私は今、女性がパリで消えたという話を中心にして話しておりますが、その舞台は必ずしもパリだけではない。ロンドンであったり、ニューヨークであったり、ローマであったり、あるいは香港であったり、これらいろいろなヴァリエーションがあるわけですが、それらはすべて外国の都市なのであります。なぜそれが外国であるのかということですが、これには、やはりそれなりの意味がある。これはどういうことかといいますと、つまり彼女が消える境域が、日常生活の中であってはいけないうのですね。われわれの目が届くところであってはいけないう。われわれの目が届かない日常生活の外にあり、外というか、境界にあって、そうして、現実と非現実、その区別がまったくつけにくい、非常に曖昧な空間にいるという、そのことに意味があるのであります。つまり、われわれが行ける場所であるけれども、いわゆる日常生活の中ではないのです。いわゆるその周縁部分なのです。

昔私ども日本人が、もっと狭い空間の中で生きていた時は、こういうような曖昧な空間というのは、もっと身近なところにありました。

例えば、かつてわれわれの祖先が生きていたのは村落共同体でありますから、村を一步出れば、もう、鬼がやってくる世界。かつてはそういう境界が、すぐそこにあったわけです。ところがいまや、われわれの境域というのは、このグローバリゼーションの風潮の中で、どんどん、どんどん、外へ広がっていく。

このようなわけで、都市伝説における境界というのが、やはり外国に設定されている。このことをひとつ、ご記憶いただきたいと思っております。

それで、先ほども申し上げましたように、私はこの調査を1989年、ちょうどパリの200年祭の年でありました

が、この大革命200年祭の時から始めて、3カ月間、4カ月間ぐらい行い、さらにその後、波動的に補助調査を行いました。

パリで行ったのは、これは全部、対話形式です。この調査に関しては、面白い話がたくさんあるんですけれども、こういう話をしておりますと、これだけで時間がなくなってしまいますから、ここでは、省きます。

一番よく調査に協力してくれたのは、やっぱり若い学生諸君でしたね。やっぱり研究者や教師と学生というのは、匂いで分かるのかどうか。大学の教師がこういう調査をやっているという、非常に好意的に手伝ってくれました。やりづらかったのが中年の旅行者、私を押し売りか何かと間違えてね。一番調査しづらかったです。まあ、こういうこともひとつの調査の思い出ですけども。

一方、国内でも、東京、あるいは愛知県、あるいは青森県、あるいは静岡県といったようなところで、主に若い学生たちを中心に、対面による質問形式と、それから紙面調査形式の両方を使いながら、この調査を続けました。

それで、その時点の調査結果によりますと、日本の女性が消える場所は、日本人がよく行く西欧諸国、あるいはアメリカ合衆国、あるいは香港。これらの地域の国家、あるいは都市、これが最もよく目立ち、中でもパリ、あるいはフランスとするものが最も多かったのであります。

では、なぜそれがパリであったのか。

この噂話を最もよく知っている人たちは誰か。皆さんに今日は、お配りしませんでしたが、統計をとってみますと、十代の後半から二十代の前半の女性が、最もこの話をよく知っていた。つまり、この会場にいらっしゃるぐらいの女性の方々でしょうか。女子学生、あるいはOLの人たち、この人たちが一番この話をよく知っていたわけです。ですから、この人たちが、この噂の主たる担い手であることが想像されるのでありますけれども、彼女たちにとってパリは、どのような記号性を持っているのか。

今では、だいぶ意識は変わったでありましようけれども、少なくとも15年ぐらい前までの日本女性の意識においては、このパリは、1つの幻想都市、言わば擬似的なユートピアとして機能していたといつて過言ではないと思っております。つまり、この時代、この年代の女性たちにとって、欧米の近代都市、とりわけパリは、常にモード、ファッションの先駆けをなすおしゃれな街、世界で最も華やいだ都市として存在したのであります。しかも日本人にとって、かつては遠い憧れの都であったこの花の都、皆さんもご存じでしょうか。かつて、日本の詩

人、萩原朔太郎が「ふらんすへ行きたしと思へどもふらんすはあまりに遠し」と、うたいましたね。その頃のフランスは、日本人にとってはまことに遠い、遠い、地の果ての、これは、言わばユートピアであったわけですが、その遠い憧れの都であったこのパリは、現在海外旅行の普及、簡便化と、航空運賃のコスト＝ダウンなどによって、誰にでも手が届く、気軽な行楽の場所となったのであります。

で、日本の旅行ガイドブックの地図には、例えばこのフォーブル＝サントノレ通りの一流ブティックの1軒1軒が、若者好みのイラスト入りの日本語で記されているのでありまして、特に、フランスの言語、文化に対する専門的な知識がなくても、もはやパリは茶の間のテレビの延長線上に、日常に直結する形で開かれているのであります。

現に私が体験したことではありますが、パリへ行きますと、地図を片手に地球の歩き方とかなんかを持って、それでブランド物の袋をぶら下げて歩いている日本の若い人たちの姿をしょっちゅう見かけます。中でも驚いたことですが、かつて一度、私はルイ＝ヴィトンというカバン屋へ行ったことがありました。ふだんそんなところへ、私は決して行きませんけれども。びっくりしたことは、ジーパンにスニーカーの日本の大学生たちがその中に、ウヨウヨ、ウヨウヨ、ひしめいている。これは、本当にびっくりした。みんな彼女のために、お土産を買い漁っているんですね。その若者たちで、店の中がごった返している。

ちなみにフランスの学生たちは、ルイ＝ヴィトンのカバンなんか決して持ちやしません。みんな、粗末なカバンを提げて。中に教材やノートが一杯入ったカバンを持って。毎週、毎週、試験やりますから、青くなって学校へやってきます。ブランド物なんか一切買いません。まあ、これは余談です。

このような、言わば憧れの、しかも手に届くところにある、かつては、もう、本当に遠い憧れであったところの花の都が、これが自分の手に届くところ、現にいくらかの交通運賃を出せば、簡単に行ける場所として、われわれの前にある。簡単にその中へ入っていくことができる。

ところが、そのようなパリは、パリに代表される言わば幻想都市は、決してわれわれの体と心と一体化することはないわけです。なぜならば、われわれはあくまでも日本人ですから。パリは、われわれの故郷でもなければ、母国でもありません。いかに思い入れようと、それは結局は、フランスの文化。フランス人の生活論理、生活感情に支えられた異境なのでありまして、われわれは決してパリジャンにもなれなければ、パリジェンヌにも

なれないのであります。

私の親友のフランスの教授が、日本に来て、大変びっくりして、こないだ私のところに電話をかけてきました。渋谷の街でバーに入ったら、目の青い日本人の女の子がいた。わかりますか？なんか今、青い目になるコンタクトというのがあるんだそうですね。それでびっくりした。それで喋る言葉は日本語だというんですね。これはどういう変身願望が分からないけれども、いかに目が青くなったとしても、髪の毛を金髪にしたとしても、われわれは日本人としてのDNAを持ち、遺伝子を持ち、われわれの遠い祖先からの文化を背負った、日本人でしかあり得ない。その二律背反。つまり、この日本人がパリに抱く、より広く言うならば、日本人が異国、あるいは異国人に抱く裏腹な感情。一方での憧れ、そうして一方での疎外感。この二律背反の気持ちは、日本人がこの異国、また異国人に、伝統的に抱いてきた賛嘆と恐怖という、相反する感情に通ずるものなのかも知れません。

また、このパリという街は、非常に華やかなまちではありますが、一方では犯罪の多発する恐ろしい都市でもあります。私はこの調査をするにあたって、公的機関を始め、あらゆる場所をしらみ潰しに歩きまして、調査をいたしました。そういう所で聞いた話ですが、実際に日本人の若い娘さんが消える事件というのは、日常茶飯事としてあるのだそうですね。ただ、そういう事件が、あまり公にされないで、闇から闇に葬られてしまうということも多いのだそうです。

いろいろな話があります。例えば、これは新聞の記事にもなったことだけでも、オルリー空港からシャルルド＝ゴール空港、この2つの国際空港の間の移動の最中に、鉄道の引き込み線のところで死体で発見されたとか。それから細い暗闇の通りを歩いてたら、建物に引き込まれてしまって、そこでレイプされたとか。いくらでも、そういう話はあるようです。

ですから、このような犯罪都市という一面は、これはパリに限らないけれど、ニューヨークもロンドンでもそうですけれども、あるいは東京もそうですけれども、大都市の一面として存在するのです。

今申しましたような事件は、ある場合はメディアを通して、ある場合は口コミで、ただちに人々に提供されます。何かのはずみに、そこに住む駐在員、あるいは旅行者としてのわれわれが、その事件に巻き込まれないという保証は何ひとつありません。

街での楽しい散歩の途中で、素敵なブティックに入っ、うっとりとしンデレラの変身のような自己陶醉にひたることもできるけれども、ところがわれわれが見入る鏡が、実は、素通しであって、その奥から姿が見られて

いる、かも知れないという恐怖も常に存在するわけです。つまり、マジックミラーの裏から、見られている。あるいは、われわれが踏んでいる床が落とし穴になっている。このような薄気味悪さが、常に存在するのであります。要するにパリとは、正・負の相反する二面性を持つ現代都市の典型であり、複雑に入り組み交錯する空間の中で、女性が消える舞台としては、最もふさわしい場所として、イメージされたということではなかったか。繰り返しますが、この象徴性は、ニューヨーク、ロンドン、ローマ、あらゆる都市にも共通することです。

さらに付言しますならば、この伝承話例の中には、娘が日本国内の東京や横浜などで失踪したという話もあるのであります。

青森の高校生が、アンケートに答えてくれた事例でありますけれども、こういうような話があります。

「ある雑誌で、東京のほうでの話なんだけど、お母さんと娘さんがブティックに入って服を着ていて、娘さんが2階の店に行って試着しようと試着室に入ったところ、20分たっても出てこないため、お母さんが店員さんに聞いたら、さっき帰ったみたいですよと言ったきり、そのまま、その娘さんのお母さんがどこを探しても見つからなかったという話」と。

こういうようなことを書いてくれています。この場合はこの幻想都市、娘が消えるまちが東京ということになっているわけで、この話例の東京はまさにパリと同じ記号性を持っているわけです。つまり、地方都市、弘前なり青森という、この都市から見ると、東京は、まさにこの花の都としての疑似ユートピアとしての意味合いを持っているのであります。このほかにも、この女性が消える場所を新宿の歌舞伎町といたしましたり、ご存じですね、歌舞伎町。盛り場ですね。あるいは横浜の中華街、これは中国人地域ですから、一種の日本人社会の中での異国人社会といってもいいでしょうね。このような事例もあるのであります。

一方彼女が発見される場所は、つまり、手足をちょん切られて、あるいは売春窟でダルマさんにされて見つかったというような場所は、彼女等が失跡した場所よりも、さらに漠然として、さらに遠い、どこかの売春窟、あるいはどこかの見世物小屋。発見の地名が明確に示されないことが多いのです。モロッコとか、香港とか、どこかよく分からない…。よく分からないのだけれど、と言われることが非常に多い。これは要するに、彼女が地点の特定できないさらに曖昧な辺境、言わば他界、別の世界、人間界ではない別の世界。この「他界」に拉致されたことを象徴しているのであろうと思われれます。

例えばアルジェリアにしても、モロッコにしてもそう

ですけれどもね。昔、日本の流行歌で、「ここは地の果てアルジェリア…」という、「カスバの女」という歌がありましたが、ここにイメージされているのは日本人にとって、もっとも遠いアラブ社会。イスラム社会。それはキリスト教社会よりも、仏教社会よりも、はるかに遠い。もう何がなんだか分からないような辺境として意識せられているのであります。

消えた日本人女性が、何か分からない、そういうところから発見される。つまり、その境界は他界だというような、そういうような意識でもって語られている。そのところをご理解いただきたいと思うのです。

さて、次ですが、この噂の舞台が、パリやフランスであるという、もう1つの理由なのですが、これは、実はこの「消えた新妻」の噂が起こった1970年代、60年代のおしまいから70年代の初めにかけて、これにやや先立つ形で、フランスでこれに非常に似た白人女性誘拐の噂が広まったのです。日本における「消えた新妻」の噂は、このことに、おそらくは密接に関係しているであろうと思われれます。

どういふ話であるか、次にご紹介いたします。

グルノーブルで、グルノーブルというのは、かつてオリンピックが開かれた、あのフランスの南の都市でありますけれども。このグルノーブルで、ある実業家が妻を街の大変優雅なプレタポルテ、つまり既製服の店に連れて行きました。店の外で、車の中で彼は奥さんを待っていた。ところがいくら待っても、奥さんは出てこない。そこで彼はしびれを切らして、店の中へ入って尋ねると、誰も入って来なかった、と言われた。で、その夫は、妻が中に入っていたことを確信していたから、それで外へ出て、すぐさま警察へ行って、届け出たというんですね。で、警察はすぐこの家の中へ入って行って家宅捜索を行ったところが、店の奥で昏睡状態に陥っていた彼の妻を発見した。彼女の腕には麻薬注射の跡が認められたと。このような話であります。

どうですか、これは一番最初に話した日本の奥さんがフォーブル＝サントノーレのブティックに入って、落とし穴に落ちていたという話と非常によく似ていませんか。あのフォーブル＝サントノーレの日本人の奥さんの話も、実話として話されたわけです。ところがその結構が、このフランスの話と非常によく似ております。話としてはこのフランスの話の方が古いのです。

この話は、実は、1969年、英国の、イギリスの *Esclavage sexuel* (性の奴隷) という、これエロ本でしような、おそらく。このような本に初めてこれが掲載されて、それがただちにフランスの雑誌、*Noir et blanc* (黒と白) という、この雑誌も今は廃刊になって

しまいましたけれども、このような大衆雑誌に、ほとんどそのままの形で仏語訳されて掲載されたわけでありませう。これが1969年のことであります。ところが、この雑誌が発売された直後に、「オルレアンの噂」という有名な噂が、ほぼフランス全土に広まっていったのであります。このオルレアンというのは、どういう街かと申しますと、今はパリのベッド＝タウンと言ってもいいでしょう。パリに近いフランスの中部、ロアール川の北岸にある一地方都市であります。皆さんも、ジャンヌ＝ダルクの生まれた街ということで、彼女が救国の使命に燃えて立った所ということでご存じでありませうけれども。私もこの調査のために、この街へ行きました。

実はこの街のユダヤ人が経営する有名な既製の店、6つの店で、若いフランス娘が誘拐されて消えるという噂が立ったのです。フランスの社会ではユダヤ人の洋服屋と、それから家具屋さんが多いのです。非常に多いのです。このようなブティックで、若いフランス娘が消えてしまう。それで地元の警察が手入れをしたならば、2～3人のフランス娘が発見されたけれども、彼女たちはどれも麻薬を打たれて、白人貿易の対象とされようとしていたというのです。この白人貿易、つまり、白人の女性を性的対象として、これを売り買いする、人身売買のことです。どこに売るか。これはアラブ人社会や黒人社会、このような有色人種に売りさばくのでありませう。古くは十字軍以降の中世、この種の行為に関与したユダヤ人たちがいたということを指摘する人もあります。

この噂は、たちまちフランス全土の都市に広まっていったのでありますけれども、この起点、発祥の地となったオルレアンの街にちなみまして、「オルレアンの噂」と呼ばれました。

皆さんにお渡しした資料の最後のページに、写真をつけておきました。それが、この雑誌、フランスの雑誌の *Noir et blanc*、その写真の表紙です。右がその表紙です。それから、その写真の左側にあるのが、その記事の内容。このようにして白人娘が拉致されて、箱に詰められて、どこかに売られていくということでしょうね。

それからその下に、これはある新聞記事の部分ですが、これは地方紙、オルレアン地方の地方紙の部分であります。このような噂が、いかに当時の世情を賑わしたかです。フランスの社会問題になったわけですね。ユダヤ人社会を攻撃するものでありますから。ユダヤ人の店でフランス娘が売られるということで、いわばこれは、人種差別、人種偏見につながる問題へと発展して行く可能性を十二分に持っていたわけですね。

こういうような噂が立った以上、フランスにもユダヤ人はたくさん住んでおりますから、これを放置してお

けない。フランス政府も黙ってはいられないわけですね。それで特に、フランス在住のユダヤ人の学者たちが、これの調査を始めた。この代表的な学者が、エドギヤール＝モラン、社会学者です。この人がグループを組みまして、この実態調査を始めたわけですね。このオルレアンに乗り込んだわけですね。

その結果、この噂が、実は、事実無根であるということがわかりまして、で、公権力もこの噂を打ち消したわけですね。否定したわけですね。そういう経緯を経まして、間もなくこの「オルレアンの噂」は沈静化していきわけですが、一時は、オルレアンから始まってパリ、それからこのルーアン、トゥール、トゥールーズ、あらゆるフランスの東西南北の大都市、中都市にこの噂が広がっていった。で、それはまた短期間に沈静化していったわけでありませう。

それで、どこからこういう噂が起こったのかということですが、エドギヤール＝モランによれば、おそらくは、ある閉鎖された社会、特に、性的に異性から隔離された高校生、大学生、OL等々、若い女性たちの集団の中から、こういう噂が発生したのではないかと。特に、思春期にある彼女たちは、実社会から隔離され、閉ざされた社会の中で、性的な幻想を生み出すに適した環境にいるから。それはあたかも、その噂が実際に生じたかのごとくに、彼女たちの中で幻想的に語られ、次第にその幻想が増幅されていったのだと。まあ、このような仮説を立てたのであります。

で、またこのモランは、この噂の話型が、このオルレアンでユダヤ人のブティックに捕まったという、こういう特定の時と場所ということを除いた、より一般的な話型が、すなわち白人の娘がどこかの街で誰かに拉致されるというような、より一般的な話型が、より古い時期に、ほかの都市でさまざまに存在していたとして、いろいろな事例を上げております。例えば、マルセイユの牢屋の中で、もっと早い時期に、その牢屋の中の女囚、女の囚われ人がこのような話を語ったというような話をも、彼は例として上げております。それは、今私が手にしているような本として、フランスでは発刊されております。これは日本語にも訳されております。「オルレアンのうわさ」という本で、日本語でも読むことができます。

私もまた、この日本人の調査を行う一方、私の友人や私が教えたパリ大学東洋言語文化研究所というところの学生たちを対象に、この調査を行ったのであります。このような消えた女性に関する、フランス女性がオルレアンをはじめ、さまざまなフランスの都市で消えたという噂がある一方で、失踪の地が中東、フィリピン、台湾、イタリア、オーストリア、バルバドス等と、世界のあち

らこちらに広がっている事例もありました。つまり、オルレアンの噂そのものは、発生後間もなく沈静化したのでありますけれども、特定の人、特定の場所に直結しない、より一般的、より抽象的な女性失踪の噂は、今もフランス社会の中に深く沈潜していると言わなければなりません。

今でもそのような噂は、言わば沈み込んだ形で、フランス社会の中に今なお息づいている。それが何かあれば、再び表層に浮かび上がり、生まれ変わってくるわけです。「オルレアンの噂」というのは、たまたまそのある1つの時代に、ある社会的な条件に則って生まれ出た、1つの現象の事例に過ぎない。

ここまでのこの「オルレアンの噂」に対する話、ご紹介の区切りであります。

次に翻って、わが日本のこの「消えた新妻」の伝承者、あるいは伝承の契機はどのようなものであったのかのお話をいたします。

「消えた新妻」、この話を誰が一番知っているか。これは先ほど申し述べましたとおり、私の調査の結果によりますと、年齢別には十代、二十代の青少年層が最も高い。特に、その中でも、パリに長期滞在しております者、あるいは短期でも、3カ月ぐらいでもよろしい。つまりは、実際にパリに住んだことがある者。これが最も高い知悉度を持っている。次には日本の首都圏、つまり、東京、大阪等の大都市、あるいは名古屋等の大都市の住民がこれに次ぎ、そして日本の地方都市、これが最も低い。このような傾向が存するのであります。

もう一度繰り返しますと、パリに住んだことのある人間が最もこの噂をよく知っている。次には大都市圏、特に、東京を中心とする大都市圏。これが地方に行くに従って、知悉度が低くなっていくんですね。

私の対面調査の対象は、せいぜい500人か600人、このぐらいの人数ですから、アンケート調査といっても、これは何万というような数には到底及んでいません。ですから、これがどれだけ正確なものであるかということ、一概に言えません。正確を期するためにはもっともっと調査をしなければいけないのですけれども、一応の傾向としては、噂が大都市を中心に広く伝承されていったということは言うことができるのではないかと。また、これを男女別に見るならば、国内に住む男子集団の知悉度が相対的に最も低い。これに対して、海外駐在員やその奥さん、スチュワーデス、あるいは留学生、女子留学生。海外との係わりの深い、これらの人々の集団。あるいはまた、海外旅行をする女子学生やOLなどの人々の各集団、特に、20歳代の女性のそれが最も高い。

例えばニューヨーク駐在員の奥さんから聞いた話で、次のような事例があります。

駐在員社会の中で、駐在員の奥さんが消える。ニューヨークの話ですが、ビルの隙間からニュッと手が出てきて、道を歩いていた駐在員の奥さんが消えた。3年前の話で、駐在員の間では有名な話だということです。

あるいはまた、スチュワーデス集団に広まった話。10年ぐらい前に日本のある航空会社のスチュワーデスが、ロサンゼルスのブティックに入っていなくなってしまった。後に香港で手足が切られて見つかった。3年前に、スチュワーデス仲間の先輩から聞いたといいます。やはりスチュワーデスという1つの閉じられた女性社会、あるいは仕事社会、職場社会、そのなかでこういうような話が伝わっている。

さらに、日常的な共同体生活が外縁に接触する瞬間、どういうことかということ、つまりは、海外旅行、あるいは海外生活などが、伝承行為における大きな契機になっている。分かりやすく言うならば、女子大の修学旅行の際に例えば次のような話が話される。

日本の女性がブティックの試着室に入って、そのまま出てこない。どこかに売られるそうだと。いつ、この話を聞いたかということ、この旅行の直前、学校側の注意事項として聞かされたというんですね。

ですから、繰り返すならば、知らない街に実際に住む、あるいは、そこへ出かけてゆく、われわれの住んでいる共同体社会から外縁の部分、そこで暮らさなきゃいけない。あるいはそこへ旅行しなければいけないというような場合に、この話が語られる傾向が非常に強い。

で、この噂の伝達手段ですが、最もこれが語られるのが、「口から耳へ」の社会。これはモランのいうように、閉ざされた駐在員社会、女子大生の海外旅行集団等々、このような閉じられた社会での口コミで伝わる契機が最も強いのであります。しかし一方ではマス＝メディアが、このような特定の社会集団を越えて、情報を広く無差別に提供している。この傾向はますます強くなっております。私が調査した15年前にも、雑誌、週刊誌、あるいはマンガ、あるいはテレビ、このようなもので放送あるいは発刊されているものを見たという人が、ぼちぼち現れていましたが、おそらく今では、例えば、インターネットを通してもっと広く、もっと無差別に、1つの集団というものを越えて、無制限に広がっているのではないかと、私は想像いたします。

で、この日本の「消えた新妻」の話は、どのようにして始まったのか。私が、初めてこの話を聞いたのが、最初に申しあげましたように、1973年前後「オルレアンの噂」の広がったほぼ直後であります。調査の限りでは、それは「オルレアンの噂」に代表される白人貿易の噂と

直接の関係があったのではないかと憶測されます。その発生時期も、部分的なモチーフは別として、「オルレアンの噂」の発生伝搬のそれよりは、さかのぼることがありません。これは本来、フランス社会に生まれた白人婦女誘拐の話が、そこに住む日本人たちに取り入れられ、日本人婦女拉致の話としてアレンジされていったものと思われるのであります。

より具体的に言うならば、このような噂は、フランス社会に在住する留学生、または会社駐在員等々の言わば出島型日本人社会集団の中に移入され、醸成され、やがてそれが日本本土に持ち込まれてきた可能性がきわめて強いのであります。

もとより日本にこのような話を受け入れる土壌がなければ、いかにそのような話が持ち込まれても、このような話はたちまち消えてしまったであらうでしょう。ところが、このような話は、わが国にも存在したのです。例えば、鬼や人さらい。鬼や人さらいに婦女子が拉致され、そうして、心身に変形をほどこされるという話。言わば「消えた新妻」の元の形、親の形ともいべきものが、すでに存したのです。つまり、これが私のいう神話的祖型というものですが、そのような日本人の集合意識の中に組み込まれて、日本人社会の中に潜伏している神話的話型に、外来のフランスの噂が刺激を与え、活性化させ、増殖を促していったのではないのでしょうか。

つまり、しかるべき社会的条件、増加する日本人の海外体験と、それに伴う境界観念の変化、つまりは、かつての村社会から海外へというような境界意識の拡張の中で、それに伴う、未知、あるいは異質の環境の変化。もはや隣村は辺境ではないけれども、辺境そのものは存在し、フランス、ロンドン、そのような曖昧な境域に押し広げられてゆく。その環境の変化のメカニズムの中で、従来の共同体社会のアイデンティティが崩壊し、崩壊していくその不安の中で、噂が拡散していったのではないかと考えられるのであります。

次に、噂に刺激を与える実際の出来事について。この噂話は、いかにもグロテスクですね。このような話の怪奇性、妖気性に合わせて、実際にこのような似たような事件が外国で発生している。私がさっき申し述べたように、日本人の女性が、現に向こうで殺されたり、絞め殺されたり、刺し殺されたり、そういう事件はかなり頻々と起こっております。そのような事件が起こっているという危機感も、この噂の命脈を支える力となっているようであります。拉致に関していえば、今は、北朝鮮がかかわったものの方が日本の社会問題としては大きなものになっておりますけれども。

このように日本人女性が実際に強姦や盗難の事件に遭ったという、また、実際に失踪したという、きわめて

確度の高い情報が日常的に提供されておりますが、これらのさまざまな話は、初めはそれぞれに具体性を持って語られながらも、伝聞の過程の中で、次第に1つの情報を統合しようとする力により、一定の話の型に収斂されてゆく。いろいろな話があるんですね。あるんだけど、それが結局は、話し、話され、聞き、聞かれ、その過程の中で、さっき一番先に私が話したような、試着室の中で消えて、手足をもがれるというような一定の型に統合されていく。これは口承伝承の1つの傾向でありませぬけれども、その傾向はきわめて強いのであります。

ただし、この「消えた新妻」の噂話をフランスの噂話の影響だけと決定づけてしまうことも、危険であります。同じような噂話は、例えば先ほどお話ししたように、アメリカにもありますし、ドイツにもあります。ベルリンの有名なKというデパートのトイレの窓から女性が拉致され、十文字に紐をかけられて吊るされて、トイレの窓から下ろされるという話を、ベルリンから来た学生から聞きまして、私とフランス人の学者の親友が、2人で調査に行ったことがありました。さすがに女子のトイレの中には入れませんでした。デパートの中で話を聞きましたら、トイレには全然、窓はないそうで、残念ながら、その話が事実無根であるということが分かったのです。ですから、このような話は、少しずつ形を変えながら、いろいろな国や地方にあるわけです。日本人の「消えた新妻」の話は、この「オルレアンの噂」の関係で、フランス人社会との関わりが一番深いとは思いますが、必ずしも、それが100%とは言いきれないということを今、申し上げたいわけでありませぬ。

香港にもこの話が多いようです。面白いことに共産社会にはほとんどありません。ベトナムでも行きましたし、チェコ、モンゴルなどの学生たちにも聞きましたけれども、あまりこういう話は伝承されていないようですね。

次にこの「オルレアンの噂」の話と、日本の「消えた新妻」の話の違いについてお話しします。

この両方の話は似ているんだけど、ところが、かなり違うところもあるのです。どう違うかというところ、ヨーロッパの話は麻薬のモチーフが出てくるのです。みんな、麻薬を打たれて意識を失ってしまうという。現にヨーロッパでは麻薬が広がっています。実際に注射を打たれて、わけが分からなくなってしまう。そういうことが事件としてたくさんある。そういう現代の社会を反映しているのだと思います。ただし古くから、この「刺突」、ものに刺されるということに対する恐怖のモチーフが、ヨーロッパ社会、ヨーロッパの昔話には多いのです。私のレジュメにもちょっと書いておいたけれど

も、あのグリム童話の「眠れる森の美女」。眠り姫が、つむぎ車の針に刺されて、百年の眠りにつくという話がありますけれども、あのように、ものに刺されて死ぬという、あるいは眠りというのも擬製的な死ですけれども、死ぬというその恐怖が非常に強い。現にこのような「刺突」に対する恐怖が繰り返し、ヨーロッパ社会には出てくるのです。

そのこのレジュメには書いておかなかったけれども、例えばパリにPという大きなデパートがありますが、ここを舞台とした「刺突」の恐怖の話が波状的に繰り返されているそうです。

このデパートの中で、誰かが針を持って、麻薬の針を持って、買物客を突き刺して歩くという、そういう噂が流れ、それが沈静化すると思うと、また、20年後にこの噂が出てくる。波状的にその噂が、沈静と再生を繰り返しているのだそうです。

それから、アメリカ社会でも、これはもう、10年、20年ぐらい前でしたか、私はテレビで見たんですけれども、街角で後ろからお尻に注射針を刺される。何が入っているか分かります？エイズ菌が入っているのだそうです。エイズ＝ウイルスが。…こういう噂話ね。

このように欧米社会の中では、このものに刺されるという恐怖が非常に強いのです。

一方、これに対して日本の社会では、このモチーフはあまり出てこない。むしろ出てくるのが「切られる」という恐怖ですね。やはり日本が刀社会であったということに、原因があるのでしょうか。手足をちょん切られてしまう。さっきの話にも出てきましたね。足首を切られて逃げられないようにして、片足でサーカスの玉に乗っていたとか。両足、両手をちょん切られて、ダルマさんになっていたと。金子光晴の『西ひがし』でしたか、ああいう小説の中にもすでに、このモチーフは出てきますけれども。

そのほかに目をつぶされた、耳を削がれた。いろいろな事例がありますが、そのような肉体的破損の一方で、今度は気が狂ったとかいうような精神的な破損。精神の一部がなくなってしまう例もあります。そういう欠損のモチーフがほとんどを占めているんですね。

日本の神話、昔話、説話の中にたくさん、こういう事例は見られます。一番いい例を1つ出しますと「御伽草子」などに出てくる酒吞童子。これは、まさに異邦人であるところの鬼が京都に出てきて、そして娘をかっさらっていく。で、源頼光と四天王が、これを退治に行くわけでしょう。そうすると、そこに、例えば姫君が囚われていて、堀川の姫君という、この姫君が股を削がれていたと申します。それで源頼光にどうぞお姫様、お帰りにくださいと申し上げたところが、こんな姿をもう人前に

さらしたくない。とても帰れないと言ったという。こういうシナリオとも非常によく似ているわけです。

つまり、成熟期の若い女性、若い女性が他界に拉致され、そして心身を分断され、元の共同体にもはや復帰できない、このような思想は、時代によって形を変えながらも、一貫してわれわれ日本人の民族真理の深層に潜みながら、時代の社会的状況によって、その衣、形を変えつつ、再生を絶えず繰り返し、表層に現れてくる。

このような心身の分断、欠損のモチーフは、これは、私が長いことテーマにしている研究課題ですが、ある者が他界に足を踏み入れ、この世とあの世、この他界に足を踏み入れたその証拠として、必ず体の一部が、あるいは精神の一部がなくなってしまうのが特徴です。

例えば柳田國男も『一つ目小僧その他』という論考の中で書いておられますが、他界からやってきた神が、この世に足を踏み入れた途端に、足を蹴躓いて木の枝で目を突ついて片目になってしまった。それで、そのこの地にとどまったというような伝承があるのです。つまりは、それでなければ移動が自在な神が、あるいは人間が、体の一部を損傷したのために、そのこの地に縛られる、繫縛されざるを得ない。

これを「消えた新妻」に当てはめて考えてみると、非常によく分かるんですね。例えば、この見つけられた女性、はるかモロッコのサーカスで、あるいはアルジェリアの、あるいは香港の売春窟で見つけられた女性は、手足をちょん切られ、そして帰って来いと言ったら、決して帰って来ようとしない。もう恥ずかしいから帰れないと。あるいはもう、頭がおかしくなっていて、もう復帰ができない。元の共同体社会に決して戻れない。それではどこにとどまるか。売春窟あるいはサーカスにとどまっているわけです。

このサーカス、見世物小屋、売春窟、これらは何の記号を表しているのか。これらは、この世とあの世との境、つまり、この世でありながらこの世でない、まさにこの世の出店、あるいはあの世からの出店、その境界を意味しているのですね。

つまりこの女性は、この世に張り出した他界、この世でもない、あの世でもない、この境界に変形してさらされている。「人間界・他界」の境界を挟み、その両方の世界に肉体や精神が分属するという、古来の神話観念を踏襲しているのです。

ですから、この「オルレアンの噂」に端を発した日本の「消えた新妻」の話というのは、日本古来の神話的シナリオが、日本のグローバリゼーションという大きな変革期の中で、それに刺激を受けて再生を果たしたんだと。このように言い換えても、いいのではないかと思います。

次に「オルレアン」の噂と日本の神話とは、それぞれの社会の中で、どのような消長をたどったのでしょうか。フランスの社会の場合、フランス娘が消えるユダヤ人のブティックは、あくまでもフランスの社会の中にある。ここに公権力が介入して、噂の真偽を確かめれば、ただちにこの噂がニセモノであるということが分かります。ですから、ただちにこの噂は消えて行ったわけです。しかしながらその一方、中世十字軍以来のいわゆる白人貿易、ユダヤ人、アラブ人、黒人に対する偏見に基づく白人の娘拉致の噂というのは、もっと根深いところで、やっぱり潜伏しております。

一方、日本の場合、この「消えた新妻」の話は、かなり長く命脈を保ちました。どういうことかという、この娘が消える境界が、やはりパリなり、ロンドンなり、香港なり、モロッコなり、われわれの共同体のはるか外にあります。つまり、その実態が分からない。調査のしようもない、このようなところに、境界が設置されたからです。女性を拉致するのは、要するに日本人ではないどこかの異国の、誰か分からぬ異国人です。あくまでも、それは住み慣れ、安定した共同体の外縁、はるかに遠い世界の周縁で起こる出来事です。拉致の場所、拉致者、被害者の発見場所がこれほど曖昧なのは、このことがおそらく原因しているのであろうと思います。

つまりは、「消えた新妻」というこの都市伝説は、フランスの白人貿易の噂の日本的な改変というよりは、都市の現代化と日本人の行動範囲の拡張に伴う境界の拡大と曖昧化の状況の中で、意識の奥底に眠る古来の神話的シナリオが、再生の刺激を受け、絶好の活性化と増殖の場所を見出したということなのであります。

ただし、このような私の推論も、部分的に訂正をしなければいけないのではないかと。というのは、3年前に、私はこの話についての再調査を、東京都区内、静岡市、愛知県、京都市の4地区において行いました。そうしたところ、この知悉度ははるかに落ちております。つまり、この話を知っている若い人たちのパーセンテージが、もう圧倒的に少くなっているのです。噂自体が衰退の傾向をたどっているのです。

それから、もう1つ面白いことですが、フランスの噂、パリを舞台とした噂が非常に少なくなっている。それに代わる舞台として特に目立ってきたのが中国。上海というような大都市のほかには海南島、中国の奥地、中国の農村部、というような、前には決して見られなかった事例が出てきております。

これはやはり若者の中国への興味が近年、特に増加していることと関係があるのではないかと。さらにこれに、タイ、インド、東南アジア、あるいは韓国、その他アジア各国などの事例を加えますと、この欧米で日本の女性

の消えるという話のおよそ4倍に近い事例が、アジアの事例として出てくるわけでありまして。

この傾向の変化は何によるのか。若者のアジアに対する関心の拡大ということもありましようし、もう1つは、最近とみに増加しているアジア人による日本国内の犯罪も関係しているかも知れません。あるいはまた、面白いのは、日本国内の失踪舞台として、大阪市のアメリカ村があるそうです。どういう所か私は知りませんけれども。一種の蚤の市といったようなものでしょうかね。これが先に上げた横浜の中華街とか、あるいは新宿の歌舞伎町のような内なる異境というものをイメージしているのか。そのへんのところも、もう少し分析が必要かと思えます。

それから、このような噂話が伝えられる契機としては、従来通り、友人、教師からというものが最も多い。学校共同体が、主たる伝承の場であることが分かります。しかしながら、書物、テレビ、新聞等、マス＝カルチャーの影響も見逃すことはできません。特に、インターネットや携帯電話、まったくこれは新しい伝承の媒体として、近年、とみにその影響が強まっており、このような媒体を通しての、噂の増殖も、今後は大いに予想されるのであります。

それから1つだけ言い忘れましたが、付け加えます。かつて、日本国内において、異国人による拉致の噂が広がったことがあります。ご記憶にないでしょうか。イラン人による日本の婦女子の、特に、主婦が暴行されるという話が、首都圏、あるいは名古屋近辺で広がりました。これも面白いことに、東京そのもの、名古屋そのものではないのです。そのベッドタウン、これは、オルレアンと同じような相関関係なのですが、埼玉県から千葉県にわたる小都市が舞台で、イラン人によって暴行される。それから名古屋の近辺の岐阜のどこかの郡部で、同様の噂が一時ですが、広がったことがありました。これはやはり、非常に興味深いことです。一頃、イランの人たちが、日本に多数出稼ぎに来たことがありました。不法滞在した人々も多かったようですが。日本のバブル期ですね。彼らイスラム教徒は、われわれにとって、最も遠い存在です。クリスチャンはわれわれの中にもたくさんおりますし、それから黒人社会も、同様です。例えばアメリカの駐留軍などの中に黒人兵がおりますから、まだ、われわれに身近です。これに対してイスラム社会は最も遠い社会です。おそらく、さきの噂はその異文化性と無関係ではないだろうということが、当時言われました。

この首都圏などの噂は、根も葉もないということで、間もなく、沈静化していきました。公権力が介入しまして、とんでもないことだということで、間もなく噂はな

くなりました。地域共同体の中で、検証が可能であったから。「オルレアン」の沈静化と非常に似たような道をたどったわけです。

もう一度、結論を繰り返しますが、この「消えた新妻」の噂話は、女性の拉致をテーマとする日本の古くからの神話的なシナリオが、欧米社会の女性拉致の噂話に刺激を受け、海外渡航の最も盛んであった時期に、その時運に乗じて広まったものと憶測されます。伝承の主たる担い手は、若い女性層でありましたが、現在、噂はやや沈静化しつつあるやに見えます。

アメリカ、ヨーロッパは、今ではそれほど珍しい社会ではない、世界ではない。ですから、この噂に関する限り、かつてのような伝播の勢いはもうありません。

失踪の舞台としての地域名にも、変化の兆しが見られます。これがどのような原因であろうかということについては、私の調査も不十分でありますし、より長い時間をかけて、より広域的な調査が必要になってくると思います。

今回は、私のこの考察の結論というよりも、1つの中間点として、一応の仮説を皆さんに申し上げた次第でございます。

まとまらない話になってしまいましたが、一応、1時間半という制限時間も来たようでございます。これもちまして、私の大変拙いお話を終わらせていただきたいと思っております。どうも、ご静聴ありがとうございました。
-拍手-

竹川：どうも、先生、ありがとうございました。

ご質問、よろしいでしょうか。

山本：あ、どうぞ。はい、はい。分かる範囲で、どうぞ、お答えいたします。

竹川：せっかくの機会、先生にお越しいただいた機会でございます。皆さん、なにかこの機会に、ちょっと先生に聞いてみたいというようなお考えをお持ちの方おられましたら、手を挙げていただければと思うんですが、いかがでしょうか。

おられませんか。

それでは、先生、恐縮ですけれども、私のほうで口火を切らせていただきます。

この話をお聞きしまして、私ども心理の立場からいいますと、噂というのは大変、興味がございまして、ただ、心理学のほうじゃ、噂が広まるというのは、題材が…題材といいますが、噂を広める材料が、みんなの関心を持つ問題であるということ、及び、もう1つは、その

題材になるものが、非常に曖昧なこと、というのがこの条件でありまして、曖昧なことと、それから、みんなが興味を持っている、関心を持っている、面白がるというような、この2つの条件がありますと、噂が広まるんだというようなことでして、例えば、今、話のありました「オルレアン」にしても、最後のほうで公権力で曖昧なところを消していった。そういうことで噂が静まっていったというので、なるほどなあと思っていたんです。そういうような「オルレアン」の話と、それから日本のいろんなものとの話の間で、先生、一番最後のほうで、日本の場合は、なんといいますか、異界の話が出てまいりまして、体のある部分がなくなるんだと。そういうようなお話がございました。

この「オルレアン」のフランスで流行っている「オルレアン」のこの最後の結末というのは、どういふふうになるのでしょうか。

山本：結末ですね。これもね、一言、申し忘れたのですが、このあとがないのです。

竹川：ああ、そうなのですか。

山本：つまり、拉致されようとしたところを発見されたと、いうところで話が終わっているんですね。そのあとこれが、どうにかなっちゃったとか、すっ飛ばされて消えちゃったとか、そういう噂がないんですよ。

竹川：ああ、そうですか。

山本：ええ。これが向こうの話で。ところが日本の話の場合、その後日談がちゃんとあるわけです。これは、やはり1つの日本の神話的な話型だと思います。つまり、変形されて、それで見つかり、そして帰れないと。それで、あの世にも行ききれず、この世にも帰りきれず、その中間に、この世からも、あの世からも、見られる中間的なところで、その人体なり、物体なりが、言わば非常に不安定な形で、そこに置かれているという、これが日本の話の特徴だろうと思いますね。

竹川：ああ、そうですか。なるほど。

山本：ええ。まあ、これは1つの神話の型と言ってもいいと思うんですけども。

竹川：ああ、なるほど。はい。

今、最近、中国とかほかのところに、話題が移っているというの、これも今、話しましたように、曖昧な

こととか、関心を持っているということと、これは密接に関係するなあとあって、そのへんのところも興味深く聞かせていただきました。

山本：はい。これはそうですね、十何年前の調査には、中国の奥地なんてことは絶対、出てきませんでしたね。それがこの頃、出てきているというのは、やはり中国に対する関心というのが、若者の間に非常に高くなっているんじゃないか。いくつかそういう事例が出てきますものだから、これだけ、やはりわれわれの身近なところとして、中国が意識されている。かなり意識が変わってきたことを裏書きしているんじゃないかと思えますね。

それから、もう1つ、先生がおっしゃったことに加えて、もう1つ大事なことは、やはり「不安」ということなんですよ。興味と、それから曖昧さ、それから不安ね。われわれの生活の不安。実際にわれわれの生活が脅かされるんじゃないか、という不安。つまり、自分への係わりがないと、噂はやっばり広がらない。つまり、食べ物の中に毒が入っているのがないかとか、それから、現にわれわれが、どこかへ行ったら、そのまま別の領域へ飛ばされるんじゃないかとかね。そういうわれわれ自身の生活に直結した不安と結びついて初めてこの噂話、都市伝説というもの広がっていく、ということであろうと思います。

竹川：皆さんのほうで、何か、ご質問事項ございませんでしょうか。この機会、せっかくの機会でございます。

何かございませんか。

あ、どうぞ。

質問者(女性)：日本では不安定な形で置かれていると、いうことですが。

山本：はい。

質問者(女性)：これはやはり、昔から日本人がどうも、靈魂を信じることと関係しているのでしょうか。

山本：あ、靈魂。はい、はい。

質問者(女性)：それを信じるとか、そういうようなこととのつながりというのはありますね。

山本：ということも関係あるでしょうね。もちろん、あると思えますよ。ええ。

質問者(女性)：で、それがまた、宗教にも結びついて

ということですね。

山本：もちろん、関係してきます。当然、関係してきます。

質問者(女性)：そちらのほうに関しては、何か先生は、お書きになったものとか、おありですか。

山本：ええ。書いたものもあります。ですから、先ほど柳田國男の片足神、片目神の話についても、ちょっと申し上げたわけですが。あの世からきた神様が、神様というのは、本来、通行自由なものなんですね。人間界、他界、これを自由に行き来できるものが、どこそこに鎮座することになったのだ。その鎮座縁起として、こういう話が伝わっていることが多いのです。つまり、なぜ、ここにとどまったか。そこで目を突きちゃって、目を1つなくしてしまった。それでここにとどまったんだと。あるいは、足が蹴躓いて、それでここにとどまざるを得なかった、というような鎮座縁起があるわけです。柳田は全然、別な解釈をしまして、これはかつて犠牲の魚の片目をつぶしたそのなごりであろうということをやられているけれども、私はそうは思わないです。やはり、この世とあの世に、両股をかけて、どちらの世界から見ても欠損として見えるという観想に基づくものではないでしょうか。いわゆる片足草履とか、片足草鞋の話がありますが、この世に片足、あの世に片足、両方の世界に神の履物が1つずつあるというような、そういうような信仰がありますよね。

例えば牛若丸が、五条の橋の上で、弁慶と果たし合いをやって、その時に、足駄を片一方脱ぎ忘れて、その足駄を保存している家が西洞院松原の民家にあったそうです。これなんか面白い。片足だけ足を残しておくんです。

シンデレラの靴も同じこと。なぜ、ガラスの靴が1つだけ残ったのか。片足はあの世に行っているわけですよ。カボチャの馬車と一緒に。ユートピアにね。で、片足だけが、この世にかかり、それがあの世に行ったことの証になるわけでしょう。あの世というのはおかしいですね。しかし宮殿というのは、宮殿の王子様というのは、象徴的に別世界のものを意味しますから。ですから、やはりこれは、この世とあの世に足をかけたその証が、身体あるいは物体の欠損という形で象徴的に語られる。私は、このようなことじゃないかと思うんです。

こんなことでよろしいでしょうか。

質問者(女性)：ええ。結構です。ありがとうございました。

山本：事例はまだまだたくさんあります。『肥前国風土記』でしたか、人間の娘が大蛇に見込まれて、出て行きます。探しに行ったら、池の畔に横たわっていたと。そして、上半身は人間で下半身は蛇になっていたのです。で、上半身が池の上に出て、下半身が蛇になって水の中に沈んでいた。明らかに上半身は人間のもの、下半身は、「あの世」のものなんです。明らかにあの世とこの世の両方にまたがった存在。こういう考えが強調されている。すべてこの神話観念のヴァリエーションじゃないかと思います。

人間があの世界に行く場合もそうだし、あの世から帰ってくる場合は、例えば「こぶとり爺さん」。ほっぺたをとられて帰ってくるわけですね。「何か」を失って。だけどそれは結局は、最後には還元されてまた、別なおじいさんのほっぺたにくっついちゃうわけだけれども。必ず完全な形では帰って来ないわけです。何かそこで質にとられたり、また返されたりというような形で。だから人間界と他界との貸し借りを両方足せば、必ずプラス・マイナス・イコール・ゼロになるわけです。

このようにして人間界と他界とのバランスが成立しているのでしょうか。

竹川：よろしいでしょうか。

そのほかに何かございますか。

山本：こう考えてゆくと、昔話にしても、神話にしても、非常に哲学的というか、何か本当に象徴性に富みますね。

竹川：ございませんでしょうか。

先生、私、噂話を聞きまして、この「オルレアンの噂」でもそうなんですけれども、もしかしたら、噂は噂なんですけれども、なにかその噂の基になったものが、なにかあるんじゃないかなというような気がしてましてね。なにか噂が、単独で、まったくの何もないところから云々じゃなくて、やっぱり、火のないところに噂…じゃないですけども、なにかあって、それを多少、面白おかしくというか、モディファイして、それが噂として、人から人へ、こう伝わっていくという過程があるんじゃないかなと、いうような気がするんですけど。

山本：もちろんそうです。

ええ。ですから、この噂話は、繰り返し言いますように、これは完全に神話的なものなんです。つまり、噂のそういう1つの話型というのは、いつでも存在するわけで、神代から現在まで存在しているのです。ただ、それがふだんはわれわれの意識下に沈んでいるわけで、そ

れが事件なり、何らかの社会的条件によって、それに刺激されて表層に浮かび上がって来る…。

ですから、これが例えば、フランス社会への不安、日本の女性が消えてしまったとか、用心しなきゃいけないよとか、そういうようななにか社会的な事件ですね。そういうようなことが、つまりは刺激になって噂が生成される。その不安は単独のことではなく、もっと社会に一般的な不安なわけでしょう。われわれが海外進出によって海外へ出て行く。その時誰しもがそういう不安を内に抱えざるを得ない。それは今日の問題であり、われわれの問題なわけです。そういうところに、例えば何か刺激剤となって、眠っていた神話的モチーフが再生し浮上してくる。これは、また、50年先、100年先に、まったく別な形で、今度は宇宙服が何かを着て出てく可能性もある。それは常に再生し、再生産されるのです。ただ、それは、あくまでも、その時代、その時代の衣を着て、別な形で、別な衣装で現れてくるけれども、本質は同じことであろうと、そういうことを言いたいわけですね。

竹川：質問はございませんか。

それじゃ、講演のほうを終わらせていただきます。

最後に先生に花束を差し上げたいと思いますが…。

先生、どうぞ、花束をお受け取りください。

山本：なにか面映ゆいですね。

竹川：じゃあ、拍手をもって…。

—拍手—

山本：どうもありがとうございます。

—拍手—

竹川：どうも先生、ありがとうございました。

山本：ありがとうございました。

竹川：これで講演会のほうは終了いたしますが、初めにちょっとお話をしておかなければならなかったんですが、今日の私、司会させていただきました私のほうは、北方圏生活福祉研究所の所長を命ぜられております竹川と申します。

それから隣には、初めにも申しました山田先生で、今回、山本先生をご紹介いただいた人間福祉学部生活福祉学科の教員でございます。

この研究所では、このような講演会をいろいろ計画をいたしております。皆さんのほうから、なにかこうい

ような講演をというようなご希望がございましたら、研究所のほうにお申し出いただきたいというように思います。

なお、先ほど皆さんのお手元のほうに、アンケート用紙的なものをお配りをいたしました。それを帰りがけに、お書きいただきまして、受け付けの入れ物のほうにお入れいただければ、ありがたいと思っております。

それから、もう1点、ご連絡ですが、20時10分にこのセンターの前から、大学のほうに向けてバスを用意しておりますので、ご利用いただきたいと思っております。途中、大学へ戻るまでの間、何か所かに停まる予定にしておりますので、どうぞ、ご利用ください。

それでは今日の講演会を終わらせていただきます。

もう一度、山本先生に拍手をもってお願いしたいと思います。

どうも、先生、ありがとうございました。

山本：ありがとうございました。

-拍手-